慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラスキンの美術批評家時代の終焉 彼の美術論に含まるる社会思想
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.9 (1924. 9) ,p.1289(109)- 1309(129)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240901-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜　錄

ラスキンの美術批評家時代の終焉

彼の美術論に含まるゝ社會思想

奥井復太郎

一

嘗て述べた如く一八六〇年はジョン・ラスキンの生涯を二つに劃す年である。簡單に云へば一八一九年に始まつた彼の前半生は美術批評家としての經歷を一八六〇年まで續けて來たが同年以後は社會改造論に彼の特色を見出す樣になつて來た。本稿は一八六〇年に到る彼の經歷中未だ發表するを得ざりし部分を簡單に記錄して、最初の計畫とは異り乍らも兎に角『美術批評家としてはじめられたるジョン・ラスキンの生涯に窺はるゝ社會倫理とその思想の發展』を一應完結せんとするものである。既に發表せる部分は繼續的に一八五三年出版の「ヴェニスの石」に及び更に續いで「ラスキンの勞働者敎育」と題した一片を以つて五十年代の中半に從事せる彼の仕事の性質とその思想的背景とを簡單に示した。故に一八六〇年までに殘る所は一八五六年以後盛んに行はれた彼の公開講演と「近世畫家論」續卷並びにその完結について語るべきである。彼の公開講演に盛られた思想、殊に「永遠の歡び」「二つの路」の二篇に含まるゝ所論については古く「ジョン・ラスキンの奢侈論」に於いて一部紹介した事がある。故に本稿に於いて主として記叙せらるゝのは「近世畫家論」の完成とその思想的發展とについてゞある。唯一應既に發表せる部分との脈絡を保つ必要上先づ簡單に諸

件を取扱ふであらう。

「ヴェニスの石」出版後ラスキンはエヂンバラに於いて「建築並びに繪畫に關する四つの講演」（一八五三年の秋）を企てた。其の翌年彼の妻はジョンに對して離婚訴訟を起し遂に離婚認許の判決を得た、この事はラスキンを頗はす所少くなかつたらうが彼を苦しむる所のものでなかつたと思はれてゐる。この事件の後彼は瑞西に旅行した。此の旅行（五月）は建築論その他に逸走せる彼が再び「近世畫家論」の執筆に復歸する所を物語るものである。瑞西の地は再び彼に平和と勇氣と感激とを授けて彼の不愉快な記憶を弱からしめ前途の光明と彼の使命觀を燃え上らしめた。此の旅行中の筆になる小冊子に「水晶宮の開場」と稱するものがある。その表題は一八五一年の英國大博覽會の材料を用ひて建設された硝子張の大建築クリスタル・パレイスに對する批評を意味す。此の計畫は教育的美術的影響を廣汎ならしむるものであるがラスキンの批評はこの、ディッケンスのよんでフェアリーランドの殿堂とした建物に現代の宗教的信念の缺陷が示せる表現をみ之れを死せる建築物と呼んだ。此の小冊子は後年ウヂリアム・モリスが繼いで叫んだ古代建築保護論である、換言すれば「近世畫家論」「建築の七燈」「ヴェニスの石」の諸所に散在してゐる彼の古代建築に對する愛情は組織的に本冊子の中に綴られたのである。しかも此の書中に後年「アン・ツー・ジス・ラスト」の中の力强き句「勇敢に幕をあげて、光をみよ」の意味に相當する一文の含まれてゐる事は興味がある。直視せざる害惡の横行に無關心なるは近代人の特色とする弊害じある、歡樂の極みを盡せる夜宴に一度四方の壁が開かれて其處に死そのものゝ如き、醜惡、困窮、壞敗せる同胞の姿が展開せられたる時、人はたゞに眼を背むけるだけであらうか、一時的哀憫の情を催ほす丈けであらうか。『食卓と病床とを隔つる家の壁―極く僅かな數呎の土地も實に困窮と享樂とを境する凡べてなるが、然かも之れによつて實際の事實は、ダイヴィーズとラザラス相互の眞實の關係は變せらるべくもないのである』と。

「近世畫家論」は此の旅行後直ちに執筆せらるべくして未だ出版を見るに到らなかつた、一八五四年より五五年にかけて更にその後數年の間フレデリック・デニスン・モリスの「勞働者學校」又「建築博物館」の關係オックスフォード博物館の建設等は彼の注意を側面に走しらせたものであり、一八五五年以後當分の間毎年繼續して執筆した「アキャデミー評論」も多忙なる彼を益々多忙ならしめた。是等について一々語る必要は勿論認むるが今はそれを避けねばならぬ。「勞働者學校」の彼の教授は後年の著「圖畫法要義」と合せて彼の思想上では一つの特色を有するものである事を注意しておくに止まる。

かくの如き事情の中に「近世畫家論」第三卷は一八四六年を隔つる事十年にして漸く五六年に出版せられた。從つて同卷に現はるゝ特色はこの十年が齎らした彼の思想的變化である。形式的にみれば彼は同書に於いて從來とつて來た構成上の系統的組織を排した。第一第二の兩卷の目次を見る者は如何に同書の形式的構成が群蜜であるかを知るであらう。然かるに第三卷は放膽なる書き流しである。この事はラスキンが各方面に漸く形式的莊重を排して卒直凱切大膽なる表現法を試みるに至つた傾向と見る可きである。其の思想的變遷に就いて云へば十年の歲月がラスキンの如く熱烈な眞理の探求者の思想上に何等かの變化を加へない事は稀れである。

既に第一卷と第二卷とは異つた氣分に於いて執筆されたものである、十年經過の後彼は先づ前二卷に述べた所と以後に述ぶ可きものとの間に連絡をつけねばならなかつた。此の意味で第三卷は比較的に彼の中心思想をよく纏めてあると見る事が出來やう。第一卷は「眞」に忠實なる可きを說いたがミスティー・ディスタンスの特色あるタアナアの作品と手法はミニュートネスそのものゝラファエル前派の作品との間に存在する表面上の對照を說明しなければ兩者を同時に稱讃する事を得ない。更に第二卷はその表現又は模倣的再現の手法に於いて著しく弱く劣等なる伊太利の純眞派（ピュアリスト）を激稱してゐる。第二卷は宗敎的純情に發する作畫的動機を尊重してゐる、この純情がタアナアその他の者にあるか否かも一つの問題である。兎に角こゝに解決すべきはタアナアの偉才は、彼の示せる「眞」の定數的實體的の性質にあるか又は「存せざる輝きと聖化と詩的夢想」とを加ふるにあるやと云ふ疑問である。

ラスキンの之れに對する態度は次の如くである。ラファエル前派もタアナアも「眞」の把持に於いては同一である事、唯「眞」には事物の本相又は眞髓を穿つものと假相又は偶然相を語るものとがある。誠に事物についてそを忠實に語るならば何人も本相眞髓を捉へねばならぬ。この本想を捉ふる力は輕々しく云々さるべきでなくして人の生來的に賦與せられた力であり、之れを呼んで想像力と云ふ。畫家にせよ他の藝術家にせよ、この想像力の有無大小が彼等の優劣を決定する條件となる、他の條件即ち畫家が用ふる線と色の關係の如きは問題でない、蓋し音樂家が如何に想像力に富めるも線と色とに關する知識技能なくして畫家たらんとしても其は他をして彼を畫家と認めしむるものでない。人各々に用ふ可き用途要具がある、この用途要具こそ多岐であつて或人は畫筆を握り他は樂器をとる、或者はペンをとり他の者は鑿を持つ。而して彼等自から用ふる要具について最高の知識と智慧とを有すべきは勿論である。故に想像力の大小强弱は決定的である。之れ藝術的に云へば創意の力である。偉大なるものはこの創意に從つて自由なる手腕をふるふ。或る者は奔放不羈、或る者は稠密細微各々自分の欲する所を行ふ。それ故に手法再現等の精粗を以つて優劣を論ずる事は出來ない。要は創意の力にあり想像力の大小にある。之の想像力は何を基とするか、常に事物の本相眞髓を凝視し事物の「眞」を糧として成長して行くものである。

故にアイディアリズム、リアリズムの兩者を區別する事は末である。愚鈍なリアリズムは排斥すべきと同じく傲慢虛尊のアイディアリズムは又不遜排すべきである。眞理は一つである、その誤まる邪道は多い、故に邪道の數丈け左樣に多くの眞理の現はれ方がある。聖書は一方「常に喜ぶべし」と訓へながら「哀しむ者は福なり」と說く、そは矛盾か、否明かに聖書は一つの動かすべからざる眞理を述べてゐる「義き事の爲めに苦めらるゝとも爾曹は福なる者なり」と。即ち哀しむ者の爲めには「常に喜ぶべし」と說く。喜びをみて他を知らざる者には「哀しむ者は福なり」と訓して「哀しみ」の存在を知らしめんとする。その中間命題は「義」に進んでつくべしと云ふにある。「義」につく時は哀しみあつて又喜びあるなりと云ふ。

この態度に於いてラスキンは第三卷を書いた。彼の中心的思想は第五卷序文に要約されてゐる、即ち神の製作の完全と永遠の美とを表明

し人間のあらゆる製作が之れに一致せるや否や又其の理法に服屬せりや否やを檢する事である。その根本的見解は純潔なる精神を有し、己の凡べてを知り常に謙讓恭順であり又自己に定められた歡と幸福の源泉である個性的能力の滿足なる運用を知り更に此の幸福に對する感謝の念、又之れに伴ふ義務感に對しては常に熱情的である人の行爲、一言にして云へば高尙な目的を誠實に保つ人々の行爲が全部に亙つて尊貴と偉大との最大限を決定する、と云ふのである。

以上は第三卷に於いて特に說かる可き理論であつた、併かし同卷の後半は「風景畫史」としての特色を持つてゐる。希臘、中世、近代人の自然に對する感情を研究し、第四卷に於ける數章即ち國民の生活及び性格に對する山嶽の影響を論じた「山嶽の榮光」と「山嶽の憂鬱」に合せて特別の論文を構成してゐる。此の問題の研究は彼自からその不完全を認めてゐる、從つて一定の形體をそなへ一つの暗示を與ふるにその滿足を止めてゐる。この問題はラスキンの如く其の幼時より大自然の影響を深く受けた者が取扱ふに於いて非常に適切である。第三卷に云ふ所も自己の經驗感得を物語るのである。自然の風物を愛する事は神が人に與へた惠みである、人が自然を愛するは本能である、故にゴシック建築は充分に自然をその製作中に取り入れた。文藝復興に於いてその自然が捨てらるゝや日常生活の周圍に自然美を見なくなつた人々は「風景畫」なるものを要求した、今日に於いても人々は自然を求める爲めに都市を離れて原野丘陵の間に赴かうとしてゐると。是等山嶽の研究は山嶽愛好者登山家に美的興味を起さしめたものとして、例へば英國アルピン・クラブの感謝を克ち得たものである。唯彼は美の奧に神を見、神を見る思索はその敎理に從つて働くの强制を感せしむる。山嶽の美、榮光は單なる興味より思索へ、單なる思索より實際的效果へと彼を運んだ、彼は進んで山地農民に自然の眞美を敎へ彼等をその「憂鬱」より救ひ榮光と幸福との中に生活せしめんとするのである。

「近世畫家論」第三第四の兩卷は一八五六年に發表された。同年ラスキンはなほタアナアの作品である「英國港灣畫集」へ緒言と解題とを書いて出版した。本書は「近世畫家論」の補足を爲すもの、その文體はラスキンの力量を示す最大傑作の一とせられ、海の榮光と航海を歌ふ言葉は海國英吉利にとつて最も珍重せらるべきものであるとされた。

此の年彼は又瑞西へ休養の旅を企てた。この旅行中彼は自己の宗敎觀について幾分の動搖を感じつゝあつた、彼の偏狹なるピューリタニズムは漸く脫ぎ去られんとしてゐた。他方その人生觀についても深く顧みる所があつた、自然の美と人生の難酷、神の惠みと之れに對する人の無知冷淡愚蒙の對照をはつきりと感じて來た、是等の感慨と自己の職責使命觀とは遂に彼をして、彼が將來「完全なる條件に於いて生活しう可き」日數を計算せしめた。この數は一萬一千七百九十五日と現はれ、ほゞ彼の全生涯を顧みて當れるものと云はれてゐる。彼は日誌其他の記錄に於いてこの日數を順序減じ去る事によつて自己の使命職責に對する感を深からしめた。此の旅行に於いて彼の身心に聊かの疲勞の感せられた事は是等の記錄によつて親ひ知る事が出來る。

同年十月ラスキンの一行は歸宅した。新しく彼の着手した仕事はタアナアの遺作整理と「圖畫法要義」の執筆とである。以下簡單に之れを

語り更に彼の講演時代に及ぶであらう。

二

「近世畫家論」第一卷執筆の理由となつた、ジェー・エム・ダヴリュー・タアナアの死んだのは彼が「ヴェニスの石」の執筆中第二次のヴェニス滯在中の出來事で一八五一年の暮であつた。彼はタアナアの遺作の散逸を恐れたが幸ひタアナアは數條に亙る遺言を殘しておいた。彼はその遺言執行者に指定せられてあつたが、形式上の不備から遺言の效力に爭ひが生じラスキンをしてこの指定を辭せしむるに至り、彼は靜かにタアナア偉才の解說者たる事を望み乍ら機を待つてゐた。一八五六年關係者の妥協で此の爭件が決着するや、タアナアの作品は悉く國有となつて國民美術館の評議員會の手に委ねられた。此の報に於いてラスキンは遺作整理に當る事を考へ、時の宰相バアマストン卿に依賴しその斡旋によつて愈々五七年匆々その權能を賦與せられた。此の勞働は翌年五月まで續き彼に精神的肉體的の激勞を煩はしたものである。彼の熱烈なる擁護にも拘らず一般は左程タアナアの作品やその偉才に就いて充分の敬意を表はさない。精神的の苦痛は其處に生ずる、後年彼は一年餘の彼の苦慮勞働が徒費せられた事に失望を感じてゐる、が彼自身は此の愛と敬の仕事に於いてはタアナアに對する當然の責任に盡すものとして厭く事なかつた。一八八三年「近世畫家論」第二卷のエピローグで曰く『タアナアの最も貴重なドローイングは國民美術館の穴倉の中に納められてゐる。が私の仕事は濟んだ。然かも英國民が兎も角も美術を研究する限りはいつか私の仕事が彼等に語る可き時がある』と。

一八五六年より翌年にかけて彼は The Elements of Drawing を著した。ラスキンは後に書家ではなかつた、しかし忠實なる觀察を忠實なる形と線に現はす技倆は之を自認してゐた。故に彼の美術論又は講演講義の類は理論的解明に附するに種々のイラストレイションを以つてし且つ又其の批評は單に想的意味の如何に止まらずして實際的技術の方面を含む所が多かつた。彼の美術評壇の名聲が大となり勞働者學校に於ける授業を引きうける樣になつてからは屢〻美術教授の乞に接した。彼は懇切に書面で應答する所があつたが、更に此の計畫を組織化したものが上記の「圖畫法要義」である。此の書の特色は常に著者が第一原理に引證して末端細目の點まで明らかにし又少なからざる道德的寓意を示した事にある。又文體はラスキン文才の驚く可き撓性を物語るものとされ困難なる美術的技術の說明にまた之れ程簡素明瞭なる文辭を以つてせるを見ないと激稱されてゐる。

ラスキンの美術教育は美術家をつくる事になくして、一般の人々が美を見て歡びを感じうる資性を涵養するにあつた。しかし此の目的は更に大なる理想に結びついてゐる。美術は言葉や文字に記叙されない性質の事物を記錄するものであつてドローイングを習ふは之の記錄を讀む力を養ふ爲めである。記錄をよむ事は之れによつて大なる知を得、更に隨伴すべき德性の涵養と幸福の增進とを齎らす。即ち永遠と平和の美を認むる精神的能力は單なる智力ではない、勿論感覺的のものでもない、その力は道德的能力によるものであつて、美を感ずる感覺的意識とその物象に對する愛と、この關係を生せしめた上位の力に對する尊敬と感謝と、この惠みに於ける自己幸福の觀念を結合した精神的能力が美を認むる最上の力である。故に美をみる事歡ぶ事は既に感謝である。

ドローイングによつて、平和にして永遠のよころびである美をみる事をうる者は即ち以上の知を得て究極は自然の理法神の攝理に悅服する狀態を齎す事となる。此の意味に於いて初めてラスキンは美術を尊重するのであり且つ（反對に云へば）彼の愛好する美術に此等の重要なる意義を附して初めて存在愛好の理由たらしめんとするものである。此の後の態度はラスキンの宗教的道德的性格が如何に彼の思想を潤色してゐるかを語るものである。

ドローイングの性質について斯くの如き必要を認めたるラスキンの所論は後ウヰリアム・モリスの正しく同感した點である。此のマスタア・アーチザンは一八八二年 Royal Commission of Technical Education 席上の陳述に於いて、彼の使用する勞働者の一般的無知を歎じ、其の無知は單なる專門的技術の修練によつて除かれず、寧ろドローイングの技を一般讀み書きの教育と同じく普遍的に課する事によつて救はれると觀じた。後年の普通教育に加へられた美術的要素に對する先驅としてラスキンの所說は實に偉大なるものであつた。

此の「圖畫法要義」は一八五九年その姉妹篇 The Elements of Perspective を得た。この透視畫法の研究は要するに理論を授けるよりも物象を正しく觀察する力を附する目的である事は前書と同一趣である。

次に彼の講演時代を語らう　一八五三年エヂンバラの講演を創めとして一八五六年三月より同六〇年三月に到る間に彼は十七回に及ぶ演說、挨拶、講演等を行つた。彼は公開講演の獅子吼を以つて彼の教理を普遍する事に多大の希望を有した、彼が友人に與へたる書翰によれば英全國の工業都市にその講演を催したい望を持つてゐた。此の時にはラスキンは講演者として最大の名聲を得てゐた。彼の講演は常に盛大で表面的には成功を納めてゐた。從つて聽衆の歡喜に引きかへて同席の講演者は少なからず不平でゐた。一八五七年以後の講演中著明なものは一八五七年マンチェスタア市の講演（藝術經濟學）「二つの路」に收錄せられた諸講演、一八五八年ケムブリッヂ美術學校の開校挨拶等である。

此の頃の講演は二種に區別する事が出來る、一つは政治、社會論が主潮を爲すもの、他は純然たる美術上の或ひは美術教育上の所說である。勿論ラスキンにあつては兩者を區別する事は困難である。美は深い原理に關係するものであつてこの關係がなければ充分に本當の美を永遠に樂しむ事は出來ないのである。所が政治、經濟の現象も彼社會論によれば同一原理に同じ關係を有するのである。故に「藝術經濟學」の講演の主目は美術を手段とした彼の政治論であつたと云ふ事を述べる者もあるが、其は深遠なる同一原理に到着する場合而してその原理を闡明する便宜上彼在來の方法即ち美術論の形式を以つてしたものであり、其は軈て手段形式に於いても純然たる經濟現象又は實際政治を以つてするに到る經過を示すものである。云はゞ是等の形式をそなへた講演は彼の形式的に直截的な轉換を色づける過渡的狀態を示すのである。

何故にラスキンが美術論より經濟論へと移つて行つたか。之れは興味ある問題であると共にラスキンの性格と傾向とを明瞭に描き出す事の出來る問題である。コーリングウッドは次の樣にのべてゐる。即ち彼は『ベンサム、リカアドウ、ミル等偉大なる權威が美術家を雇傭し職人を教育し公衆の趣味を向上し美術保護者を規律

する最良の方法について彼に敎ふる所あらん事を希望したが是等の問題は彼等のプログラム中に入つてゐなかつた』と。此の說明は一般にさう考へられてゐる一層通俗的且つ漠然な說明即ちラスキンは美術論を通して社會改造論に入つた、換言すれば美術の世界に遊ぶ彼は現代の社會狀態殊に經濟狀態に就いて己の世界と相容れぬ所多きを認めた爲めであると云ふ說明と同軌である。形式的にみれば勿論ラスキンは美術論から經濟論へと流れ込んだのである。併かし彼の社會改造論は別の機會に於いても述べた樣に「美術興隆」の爲めではない。彼の目的とするところは美術論に於いても經濟論に於いても等しく「人の生活」であつた。彼が美術に附する意義の如何に莊大なるかは前に一言した。この傾向は彼の生涯をみると最もよくわかる。即ち彼は美術的趣味の高尙な父親を持つた。そして早くより諸美術的零圍氣の中に生活するを得た。然かるに彼の母親は彼に嚴格な淸敎徒的スパタルタ式生活方法をとり更に聖書の日課によつて早くも彼に神に對する深い觀念を植えつけた。之れに彼獨特のものが彼の自然崇拜である。この自然崇拜は神と美術との間に位して之れを結びつけ樣とする。かくの如き敎育を得た彼は美術を美として丈けで見る事が出來なかつた。神に關係せしめないではゐられなかつた。この神の念は彼にあつて人間生活を規律し統一しその調和をはかる最大理法の念である。故に彼は宗敎家的である、しかるに彼が美に眼を閉ざす事を得ない所は純然たる宗敎家でない。美は神のつくり給ふ所、此の神の惠に從ふて歡び生活するものは神の定め給ふ調和と幸福の中に生活する事をうるのであると思ふ。故に彼は美をよろこべと云ふ。併かし神を忘れるなと云ふ。この關係に於いては神の定むる「人の生活」が最上最大の意義を有するのである。

ラスキンは一方美が德性の涵養を待つてのみ認めうる事を考ふると共に「人の生活」はこの最大最上の理法に從はざれば完全なものでないとした。美の原理を規律する法則と他方面の生活を規律する法則とに異る所はない。かくして彼は「人の生活」の理想化（それは神の生活と同一になる意味でなく、地上に於ける人間獨自の生活の理想化）より發して美と效用の世界の二方面に跨がる人生觀を構成するのである。享樂と勞働の兩世界の完全な運行こそ「人生」の理想である、所が現代社會は美に現はるゝ神性を無視すると共に勞働の世界を支配すべき神法をも無視してゐる。茲に彼の經濟觀がはじめて成立するのである。彼の經濟觀は「人生の理想化」に向ふ働きを意味してゐる。生活の最大調和これこそ最上最良の經濟である。彼後年の絕叫である「勞働せざる生活は罪惡である、美術なき勞働は粗暴である」の一句にふくまるゝ思想を如何にみるか、之れ勞働と美的享樂の生活との不可分を語るものであり、正しき勞働なくして美なく、美を認めざる正しき勞働は存し難しと云ふものである。

翻つてラスキンは既に之れより以前經濟現象及びその問題を研究してゐたものゝ如くである、例へば、地代、租稅、貨幣の性質を究めんとしてゐる。「近世畫家論」第五卷序文には「藝術經濟學」に含まれたる經濟論的傾向は當時この種の研究に從つてゐた結果であるとしてゐる。が此の經濟學的研究が若しベンサム、ミル、リカアドウ等と同じ立場に於いて爲されたとせよ、然かる時はラスキンの經濟論の性質を解釋する事はしかく容易でなかつたらう。幸ひに彼

は上述の理由によつて是等經濟現象の性質をあるが儘の現象そのものとして受け取る所がなかつた。彼は「人間の生活」の理想をみた。そはミレニアムではない、苦あり悲しみあり勞働を避く可からざる地上の理想である。がこの理想は少くとも「人間の幸福」を齎すものである。ラスキンにとつて幸ひな事には經濟學者はいづれもその經濟學原理の冒頭に「人類の幸福は云々」の冠句を有した。茲に人類社會の幸福を論ずるに於いてはラスキンは經濟學者に劣るものでないと感じた。之れ彼自からを「經濟學者」として振舞つた所以であつて恐らく何人も異議を述ぶる事を得ない點である。筆者もこの以外に於いてはラスキンを經濟學者と認めないのである。世上往々ラスキンを目して一般的の「經濟學者」と呼ぶ事を敢てし而してそを彼の名譽の如く思惟するに汲々たるものあるも、この「經濟學者」なる深意を知らざれば、ラスキンの價値を貶しむること事そあれ、彼を稱揚する所とはならないのである。

要するにラスキンが思索默想に於いて探り得た原理はその解明確立丈けを以つて足る性質のものでなかつた。彼は之れに實際的效果を附する强制を感じた。之れラスキンの傳道的精神であり使命であり、實體的には一八五〇年後半の諸講演となつて現はれ更に經濟論について云へば一八六〇年アン・ツー・ジス・ラストの現代經濟論攻擊、六二年のムネラ・プルヴェリスの新理論的系統の開明、一八七一年のフォルス・クラヴィヂェラ時代の實際運動になつて現はれるのである。

「藝術經濟論」は是等講演中最も有力なるものである。其の中に說く所父權的政治論であり國家政策的干涉論であつた、この議論が自由主義經濟學の發祥地マンチェスタア市で爲された事を思へばラスキンの自信と勇氣を知る事が出來よう。ヂョーヂ・エリオットはこの經濟論を以つて「傲慢なる背理」と批評した。しかし同講演即ち後の「永遠の歡び」と改題された同書はラスキンの經濟論の特色を比較的に系統立てたるもの、又以後の社會思想の思想的源泉を多く含むが故に最も推稱せらるべく、自から後年誇り述べて曰く『眞理の開明は茲に先づ組織的に論理的序列に於いて見出されたであらう。以來余が美術の政治的意義について書けるものは殆ど是等の最初の講演の發展に過ぎなかつた』と。

三

一八五七、八年代の講演については以上に於いて止める、以下語るべきは「近世畫家論」第五卷と其の前にラスキンの思想上に重大な影響を及ぼした一八五八年の瑞西旅行とである。前回と此の回の瑞西旅行で彼は瑞西歷史を研究した、そして自然の狀態と國民性の關係美術の國民氣質の影響等について彼に語る所が多かつた。それよりも更に重要なのは同年七月瑞西山地を去つてヂューリンの地に赴いた時に起つた出來事である。この地で彼は同市の美術館にあるポール・ヴェロネーズの作品を研究した。この研究と相俟つて彼は美術上宗教上の思想に多大の變改を齎らされた。

元來「近世畫家論」第三卷のラスキンは未だ第二卷の宗教的熱情を脫してゐなかつた。故にチャアン、ヴェロネーズの偉大なる才能を認めながらも彼は遂に是等の畫家の精神に同感しきれなかつた。彼が未だ尊重する所のものは素朴純信な敬虔派の作品であつた。しかるに彼の思想中に於ける美的感情又は享樂は漸次宗教的粗野簡素を征服する事となつた。此の時の書面は

彼が都會の整頓し華麗なる生活を樂しむ事の害惡に非らざるを指摘してゐる。この感情より彼はヴェロネーズの均齊、華麗、莊嚴なる人間生活をよろこぶのである。こゝで彼は以前とは反對の意味で宗教的純情の充溢せる以外に何ものもなきピュアリストの作品と宗教的感情の性質は極めて低くもその藝術的才能の鋭き人々の作品とを比較する事になつた。即ち特に高尚な目的と動機を有せず又自身極めて官能的なる畫家の作品が不變に氣品をそなへ、反對に謙讓な敬神的な畫家の作品が本質的に下等である。即ち曰く

『强く卒直な獸性は禁慾主義、出家主義、虔信主義、其の他是等に從ふ傾向に反抗して最强の智力と相結合さるべきものだと云ふ事が確かに約束せられてゐるもの、如くである。ダンテは實に、少くとも名を擧げう可き凡べての偉人中嚴肅であり又余の知れる限り最も嚴正なるものである。しかし、ホーマア、シェイクスピア、チントレット、ヴェロネーズ、チ、アン、ミケランジェロ、サア・ジョシュア、ルーベンス、ヴェラスケス、コルレヂオ、タアナア等凡べて是れ大膽に獸的である。フランシスカ、アンヂェリロ、其の他凡べての純眞派は如何にも美くしいが比較すると實に貧相な弱い人間である。』純眞なる感情は人に力を與へるものと考へられてゐる、しかし反對に善良な、强健な、自制的、壯大な獸性は詩人、美術家の性質と思へる。

美くしき顏、剛健なる四肢、奇異す可く又熱火の如き幻想的精力、物質の華麗とその愛は神の造れる所のものである、萬物に絢爛たる光を添ふる太陽も神のつくつたものである。人間の想像力に光輝ある思想を賦與し、人間の筆觸に構成、研琢、完成の力を授けたのも神である。是等の力を賦與し是等の美をそなへた神の思召は是等によつて人を迷はし神より遠ざからしむる爲めか。『ヴェロネーズの精神には雪を戴く山嶽の如き力があり、彼の腦中には、日沒時の雲の如く廣大に、清澄に整然たる光輝の中に、人類のあらゆる、華麗と威嚴とが漂ふ―此のヴェロネーズ、彼の指は火の如く、彼の眼は朝の如き彼が―果して惡魔の召使であるか……』。

之は大なる神秘である、遂にラスキンは兩者に誤りを見出すのである、ヴェロネーズは彼の力を放縱に用ひたる點に於いて、宗教的人々は彼の弱さと鈍調とを誠實、敬信と思ひ誤りたる事に於いて共に間違つてゐるとみた。曰く『喰ふ能はざるものが斷食するは差支ない、語り得ず歌ひ得ざる者が說教するも差支ない、乘物に乘り得ざる者が跣足して歩むも亦可なりである、彼等皆共によしと考へるであらう。が彼等をして世界を弊用するに先立つて先づそを統制する事を敎へしめよ』と。

故にヴェロネーズの讃歎に於いても彼は唯美的見地に立つを得なかつた。彼はあくまでも美術の嚴肅なる意義を固持する、美術は之れを歡ぶ事によつて榮え、單なる享樂の爲めに用ふる事によつて滅ぶ。即ちヴェロネーズの力は滅びの道にあつた。が大體の傾向を以て云へば彼に對するヴェロネーズの絢爛華麗の誘惑は强かつたものである、從つて第三卷所說と屢々相反する思想をこの當時の著作又は講演に見出すのである。又絶えずヴェロネーズを何等かの見地に於いて擁護せんとしてゐるのである、畢竟ずるに彼は純然たる耽美論者にはなり切れなかつたのである。從つて後年再びこの態度は改められて、彼は「純眞派」の態度は決して弱いものでないと斷定するに至つて十七年間の惱みを救ひ

得た。そは本稿の取扱ふ以外の年代に亙るが故に今は之れを省く。

次に同じくチューリンを印象地として彼の宗教的變化がある。ヴェロネーズ研究に彼の宗教觀が含まれてゐるが彼の幼時のピューリタニズムは此の機會に於いて一掃されてしまつたのである。積極的に美を追求するも其が歡びと公正とを以つて爲さるゝならば其は常に神の力と靈との中に於いて爲されてゐるのであると。

此の改宗の機をチューリン滯在のヴェロネーズ研究中の一日に得た、そして之れをプロテスタンティズムの彼の「マザア・ロー」の終焉とした。しかし之れが彼の宗教的感情が薄くなつた事を意味してゐない、「近世畫家論」第五卷に於いて讀者に注意して曰く、『余はモナスティシズムより解放せられ此の現世に於ける實際的、健全なる行動を許さるゝに到つた事を欣ぶも、此神聖なる靜止が自我的、思慮なき活動と交換せられて德を傷つくる所なしと考ふる』を避けねばならぬと。又曰く『人間の仕事は、吾人は今日人間であるが故に、名譽を以つて完全に行はれなければならない、—吾人がいつか天使たるべきか或ひは又當ては蛞蝓たりしと云ふが如きは事實上係はる所でない、吾人は今は人間なのである、從つて危險を冒しても人間の、即ち愛と公正と眞實にみちた仕事を爲さねばならぬ』。此の仕事の完全なる全力的遂行に如何なる宗教にもせよ、その健全なる基礎が在る、此の決意と吾人の爲せる所のものによつてのみ基督はその審判に際して吾人を裁き、決して吾人の信仰によつて裁くものではない。人間の世界は悲哀と苦痛とに充ちてゐる、之れを恐るべきでない。又人の世界は幾多の歡樂に富む、之れを誘惑として避くべきでない。悲哀を恐れぬ力强い非隱遁的精神にのみ惠まるゝ光榮がある。人の正しき信仰は休安を望み來世を希ふ態度でない、現在の世界に於ける己の仕事に力を持ちうる態度である。この態度に基づく決意とその遂行に限りなき榮譽がめぐまるゝのである、之れラスキンの自からよんで「ヒューマニティーの宗教」となす所のものである。

以上は美術的、宗教的に一八五八年の旅行がその徐々たる變化の過程に一段と目だつ特色を附して簡單なる記述である。ラスキンはかゝる豐富なる影響を以つて八月頃歸國した。殘れる仕事は即ち「近世畫家論」の結卷であつた。

然かるにラスキンは瑞西より歸るやチゝアン、ヴェロネーズ等の研究に忙しく、爲めに彼の父は「近世畫家論」の遲引を憂慮した。一八五九年にはマンチェスタア、ブラドフォードへの講演旅行が行はれ、之れを以つて彼の講演も一時終止した。この年の出版には「二つの路」と「透視畫法要義」とがある。彼は此の年の「アキャデミー評論」を終るや五月大陸の旅行へのぼつた。此の時の目的は獨逸美術館の研究にあつた。この旅行中彼は伊太利墺太利の戰爭開始について伊太利に同情した數通の書翰を發表した。獨逸回遊は更に瑞西を經て終つてゐる、この旅行中勿論彼は「近世畫家論」新卷の構成に思を耽けてゐた。かくて一八五九年十月の歸國は「近世畫家論」の續行を妨げる障害は最早なかつた。以下美術批評家時代の彼の最大名譽を表徵する此の著について語つて擱筆しよう。

ラスキンの著書は常に逼迫せる事情から生れる。其の事情は彼のみの感ずる所であつてもこの性質は常に云ふ事が出來る、等しく「近世畫家論」第五卷も逼迫せる事情を持つてゐた。但し其は第一卷がタアナアの熱烈なる辯護たるに

ひきかけ、之は彼の深厚なる父親に對する愛に基くものであつた。此の時ラスキンはタアナアの偉大さを益々感じ乍らも彼の自覺せる職責は單なるタアナアの辯護に止まるものでなかつた。彼は美術の意義を正さしむる任務を感じた。更に美術の意義は神意理法の解明をまつと等しく勞働の世界に於ける神法の意義を明かにしなければ「人間の生活」は完成する事がないと感じた。こゝに彼の直接にはタアナアより離れ去る動機が充分にあつた。この動機を押へて彼に「近世畫家論」を完成せしめた者は此の著述を以つて子の最大榮譽と考へた彼の父ジョン・ジュームズである。この意味に於いてラスキンの父はラスキンに「近世畫家論」を殘さしめた貢献を英文學上に有するのである。

かゝる事情と著者の勞苦との下に「近世畫家論」は一八六〇年七月十四日その第五卷を公にして完結する事となつた。其の論ずる所は草木、雲霧の美を論じたものであり、之の性質は第四卷山嶽の美の研究に相當し遂に水の美は本書中に加ふる餘地を得なかつた。又他の方面に於いても彼の省略は本書に於いて最も著しいのである。此の事は彼の研究熱の熾烈を語る傍、彼が同書の完結を速かにする事に苦心せる情を物語るであらう。而して是等の事情の結果並びに彼の圓熟せる思想發展の結果は著者をして頗る清澄靜止の態度をとらしめ、傲慢放膽なる表現、態度を少なからしめた。

第五卷後半は第一卷に起せる項目中の最後のもの即ち「關係」の觀念を論じたもので形式的にはコムポジションであり意義的には材題の選擇による神と人との關係の示し方を論ずるものである。此の後者のものについて「近世畫家論」第五卷は死と運命とを論ずる一つの人生論を開陳するものであつた。

此の書に對する批評は稱讃の合唱と云ふ事が出來る。誠に美術批評家としてのジョン・ラスキンの榮譽の最大を花飾る冠とも云ふべきであつた。しかるにこの著述の公刊さるゝに先立つてラスキンは既にシャモーニの地に向けて出立してゐた。彼はゼネヴァで第五卷校正刷を返送し彼の愛する瑞西へと向つた。しかも此の地に於いて次に執筆せる一小論文は彼が十七年間に亙つて築き上げし（否寧ろ人が彼の爲めに築き上げた）名聲を一時に失墜せしむる運命を持つてゐた。この小論文こそ彼の經濟論中の名著「アンウヰ・ジス・ラスト」である。傳記々者は普通この時を劃してラスキンの前後兩半生とする。名聲赫灼たる前生涯に對して陰慘なる後生涯を對照させる。「近世畫家論」第五卷中に彼の社會論の求むるは難くない。「アンツー・ジス・ラスト」が截然是等の美術論に對立すると考ふるは淺薄である。しかし今是等について詳細を論ずるは徒らに紙數を增加せしむるのみなるが故に筆者も他に做つてラスキンの美術論客としての半生涯を傳ふるを以つて一時擱筆せんとするのである。幸ひ幾分なりともジョン・ラスキンの美術觀中の社會思想を傳へ得たりとせば筆者の努力空しからざるのである。（終）